

○研究あれこれ

木村吉輔、セントルイスをめざす

井 岡 康 時

県の統計によると、平成 12 (2000) 年の 1 年間で、県民に発行されたパスポートは 8 万 3381 通、国外へ出た県民は 25 万 7390 人であるという。

それから 100 年近くさかのぼり明治 39 (1906) 年のパスポート取得者数をみると、わずか 57 人であった。それ以前の数字は不明であるが、明治時代の終わりころ、国外に出ようとする人は県内でわずか数十人でしかなかったのである。これから述べようとするのはそのような時代の話である。

明治 37 (1904) 年の春、木村吉輔という 33 歳の青年が、アメリカへの渡航を望んでパスポートを申請した。吉輔は、水平社発祥の地として知られる南葛城郡掖上村柏原北方の青年であった。

パスポートの取得には今とは違って面倒な手続きが必要であった。当時の外国旅券下付取扱手続 (明治 33 (1900) 年 7 月 7 日付県訓令甲第 49 号) によると、申請者はまず市町村長に申し出て、次に市町村が旅行の目的や日数をはじめ、旅費の出所や申請者の資産、前科の有無までも調査し、郡役所を通じて県に願出することになっていた。

そのようにして南葛城郡役所から提出された申請書類が県の行政文書 (県立奈良図書館所蔵奈良県庁文書明治 37 年「上級官庁稟申報告書」) のなかに残されている。これによると、吉輔のアメリカ渡航の目的は次のように記されていた。

在留年限凡ソ六ヶ月ノ予定ナリ、北米合衆国聖路易市ニ開設セラル、万国大博覧会視察ノ目的ナリ

「北米合衆国聖路易市」とはミズーリ州のセントルイス市。吉輔は、この年セントルイスで開かれた万国博覧会の視察を企図していたのである。

万国博覧会は、1851 年のロンドン博覧会を第 1 回とし、そののち、世界の最先端の科学技術や発見発明の成果を披露する場としてしだいに盛んとなって、この年のセントルイスで 12 回目を数えていた。

吉輔は万博に何を求めていたのだろうか。

申請書類には「渡航ノ発意ハ興業ノ目的ナリ」と明記されている。実は、吉輔は申請の 2 年前、明治 35 (1902) 年 9 月に柏原北方で機織伝習場を開いていた。被差別部落の女性に新しい技能を身につけさせ、職業選択の幅を広げて生活改善を図ることがその目的であった。これを県・郡役所が支援し、県立工業学校 (現県立御所工業高等学校)

が協力して機織機械を用いた技術講習をおこなっていたのである (詳細は舟津菊男「木村吉輔の機織伝習場と柏原の自主的部落改善運動」『水平社博物館研究紀要』第 3 号、2001 年所収) を参照されたい。

地元ではじめてこの新しい事業をさらに発展させるべく、吉輔は海の向こうに最新の技術を求めようとしたのに違いない。準備した旅費は 500 円、当時小学校教員の初任給が 12 ～ 3 円であったというから、現在の数百万円にもあたる費用をおそらく粒々の辛苦をもって工面し、「渡航ノ普通語ニ通ゼザルモノナリ」と記しているから英語を話せなかったにもかかわらず、ひたすら「興業ノ目的」のために、吉輔は太平洋を越えようとしたのである。

しかし、計画は挫折に終わった。県は明治 37 年 5 月 3 日付で吉輔の申請を却下したのである。この年 2 月から日露戦争がはじまっており、5 月には遼東半島での戦いの火ぶたが切られようとしていた。却下の理由は明確にされていないが、おそらくこうした時期の海外渡航が危ぶまれたためであろう。

20 世紀最初の万博となったセントルイスの会場には、160 台の自動車や自動電話交換機、気球などが展示されたという。

歴史に「もしも」はないというが、そうしたものをみることができたなら、吉輔は故郷でどのような話をしただろうか。取り組みがはじめられていた部落改善運動はいかなる刺激を受けたのだろうか。

(史料センター研究指導主事)